

# 白き帽子の放浪者

戒能靖十郎

*Seijuro Kaino*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵  
挿画  
ミユキルリア

地図  
平面惑星



目次

プロローグ	黒鳥再臨	11
第一章	拾いもの	23
第二章	にぎやかな宿	50
第三章	解放者	76
第四章	帰還の刻	102
《竜殺し》の英雄譚	討竜の章	130
第五章	〈白〉と〈黒〉	132
第六章	地の流星群	160
終章 《白き帽子の放浪者》		202
エピローグ	竜王	239
あとがき		252



登場人物紹介



リオ



シャル



エリア



ロマン



レイズ

白の狩人



アルヴィア



メリア



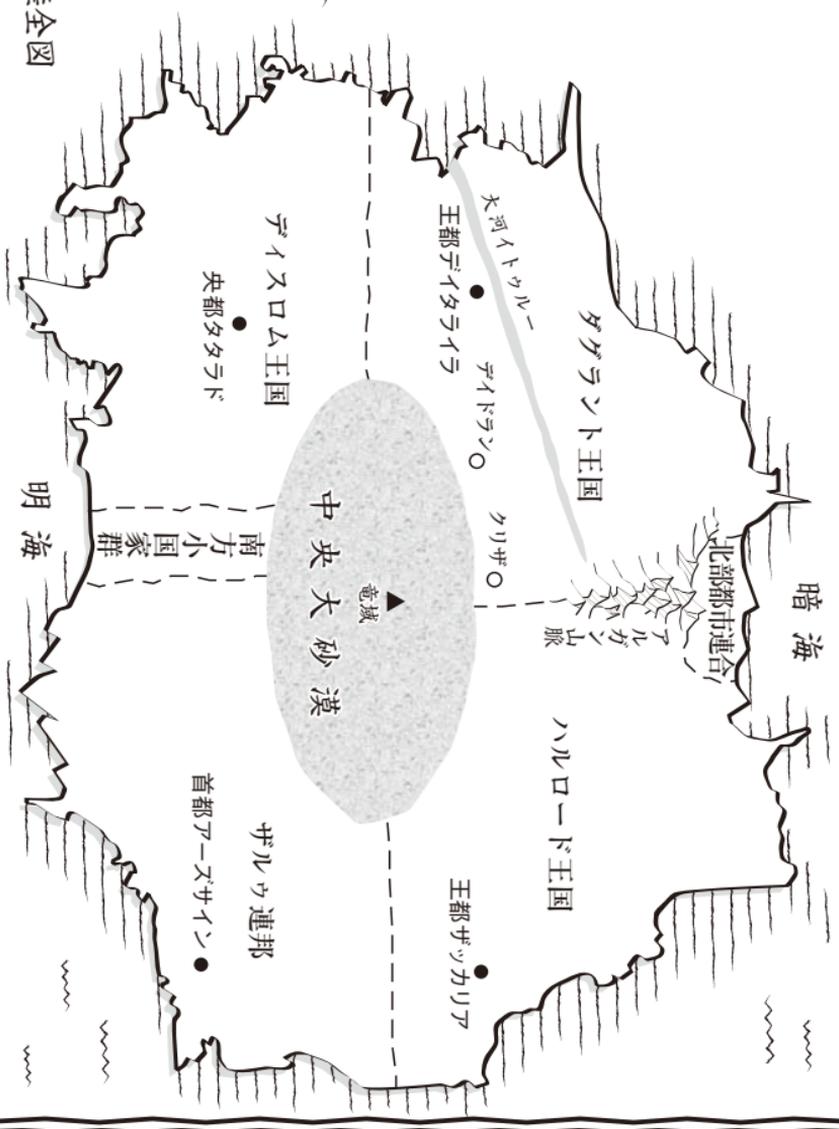
黒鳥将



白き帽子の  
放浪者



フオトキア大陸全図



暗海

北部都市連合

ダグラント王国

アルガン山脈

ハルロード王国

大河イトウルー

王都ザツカリア

デイスロム王国

首都タタラド

中央大砂漠

竜城

南方小国家群

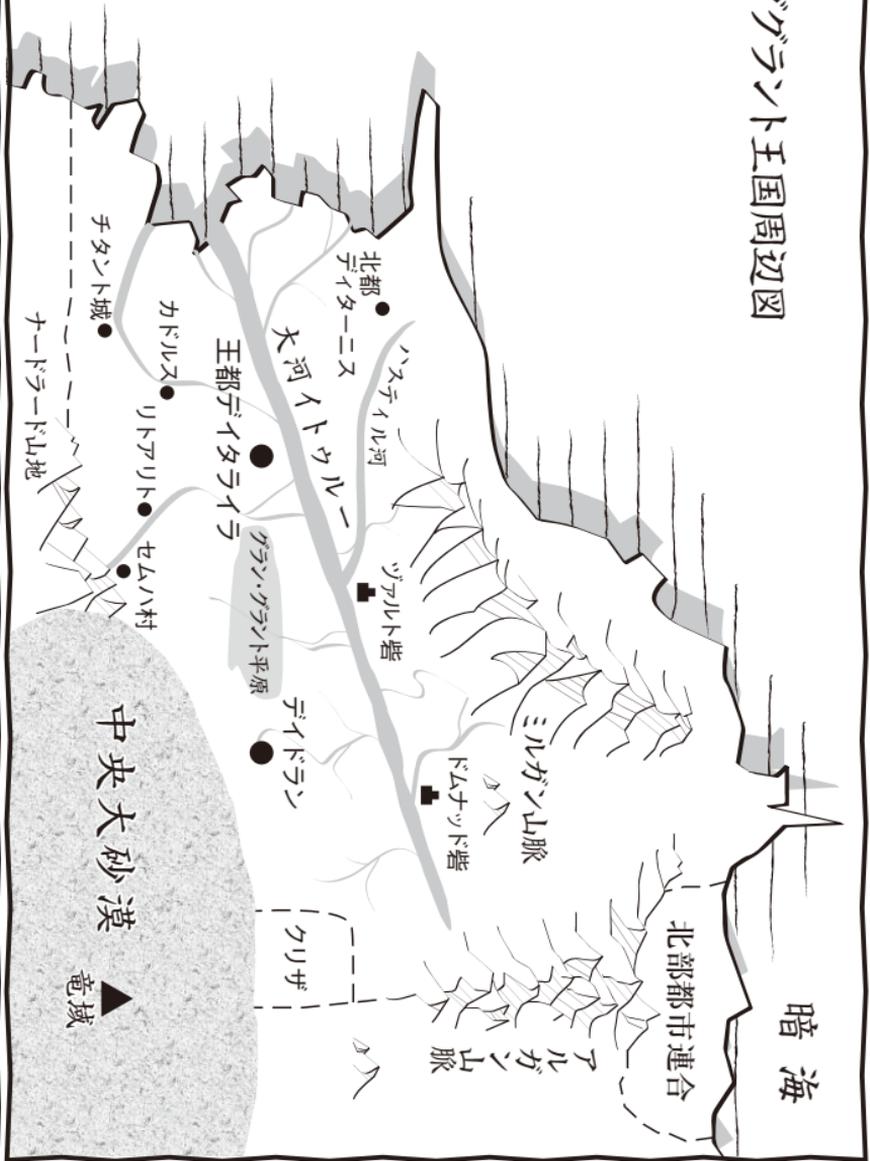
ザルウ連邦

首都グーズサイン

明海



# ダグラント王国周辺図



暗海

北部都市連合

ミルガン山脈

アルガン山脈

クリザ

ダイボラン

グラン・ダグラント平原

王都ダイタライラ

大河イトウルー

リトフリト

カドルス

チタント城

中央大砂漠

竜域

ナーブロード山地

ボムナッド砦

ツァルト砦

北都ダイターニス

ハステイル河



白き帽子の放浪者

竜王、彼の地にて蘇らん

然れども人、未だその意味を知らず

(『白き帽子の放浪者』の英雄譚 解放の章』より)

## プロローグ 黒鳥再臨

「今夜も何事もなく終わりそうだな」

デインはわずかに明けた空にむけてつぶやいた。

「あるわけないだろ。ああ、早くなかに戻ってあったかいメシが食いてえなあ」

隣のタール口が手をこすりあわせながらいう。冬の真つ只中だ。暁闇の寒さは身にこたえる。

「北部は星が綺麗なのはいいが、この寒さがな」

「星なんぞより、うまい酒が欲しいよな」

大陸四大国の一つ、ダグラント王国北部にあるザアルト砦、その見張り台でのことである。

ダグラントは国の中心近くを横たわる大河イトゥルーを境に、北部と南部とに分けられる。栄えているのは交易が盛んで、王都デイタイラもある南部

のほうだ。比べると、北部はわびしい。大公の治める北都デイターニスこそあるものの、ほかには主だった都市はない。北へいけばいくほど気候も厳しくなるため、作物の実りも南部に劣る。

そもそも北部は開拓されていない丘陵や高山が多く、人口が少ない。しかもその山中には、いまだダグラントに膝を折らない蛮族が住み着き、時折、襲撃してくるのだ。ザアルト砦はそうした蛮族に対する備えの一つである。もつとも、この近辺は長いこと危機に晒されていなかったので、見張りといつても張り詰めた気持ちはない。

それでも、数年前に比べると不安はある。「やっぱドウルス將軍がいないと心細いな」



「まったくだ。大体、あんな頑丈がんじょうな人がどうやって死んだってんだよなあ」

かつて、ツアルトを含めた北部四つの砦はドウルス將軍の指揮下にあった。ドウルスは『北の槌』と名付けられた直屬部隊を率い、幾度も蛮族の襲撃を退けて、蛮族殺しと畏怖いふされた猛将もうじょうだった。

それが三年前、辺境の交易都市でひらかれる武闘大会にも出場するといつて、一時的に軍を抜けだしたかと思うと、そのまま消息を絶った。砦の兵士たちに將軍が不慮の事故で死んだと伝えられたのは数ヶ月後、件の交易都市クリザの独立騒動がおさまったころだった。

「いままではドウルス將軍のおかげでこの砦の人間が前線にでることはなかったけどよ、次があったらいいよ出番かねえ。おお、いやだいやだ。蛮族の相手なんて」

「だったらデイドランの大砦やチタント城に配属されたかったか？」

「馬鹿いえ、そんなところにいかされてみる。ハルロードやデイスロムとの戦いじゃねえか。下手すりゃ《炎王》や《無限真理》の相手だぞ！ 考えただけでもう……」

タール口はわざとらしく全身をふるわせる。デインと同年だから、二十代もなかばになろうというのに、こういうところは子供のようだ。生まれつき具合が悪いのか、いつも鼻をずるずるといわせているのも幼さを感じさせる。同僚のそういうところが、デインは決して嫌いではない。故郷の村にいた少年時代を思い出す。

「まあ、ドウルス將軍がいなくなつて悪いことばかりでもないだろう。將軍がいたころは揉め事が多かった西の奴らが、最近はずいぶんとおとなしいじゃないか。おかげで河方面の見張りが楽でいい」

「將軍の『国王陛下は絶対』は、正直ついていけないところがあつたからなあ。そりゃ陛下は陛下なんだから偉いけどさあ」

「おい、口を慎め」

「そうはいってもよ、おかしくなっちゃまってから、もう十年は経つぞ。ふりまわされる兵士たちはたまらねえよ。三年前のデイドランの出兵聞いたか？五万人も動かしてなにもせずに帰ったっていうぜ」

「竜のせいだ。仕方ないだろう。それにその話以降は大きな採め事もない」

「採め事が無いっていうか、式典にも顔をださないそうじゃねえか」

「陛下には陛下のお考えがあるのだろう」

「ずいぶんと肩入れしやがる。そういやデインは陛下の顔を拝んだことがあるんだっけか？」

「あの災害の直後に村に来られたからな。立派な方だった。お前はいいよなあ、聞いたぜ。そろそろ退役するんだってな」

デインは笑みを浮かべてうなづく。

「やっと、いい麦ができるようになったらしい」

「ずいぶんと長くかかったな。〈竜災〉から、えーと、何年だ？」

「十一年ちよいだな」

「たいいていのところは一、二年だったろう？土地がもとに戻るまで」

「うちの村は『足跡』がある場所だからな」

「ああ……なるほどなあ」

十一年前、ダグラントを大災害が襲った。

〈竜災〉――

伝説の存在であった竜があらわれ、その毒と瘴気とでダグラント全土を汚染した事件は、数十万の死者をだすほどの災厄となった。三万の王国第一軍をたやすく退け、通りすぎることを待つしかない天災と、人々に諦念と悲嘆とで仰ぎ見られた生きる伝説は、しかししたった一人の男によって討ち取られた。救国の英雄には富と名声と都市が与えられ、男は領主として君臨した。そして隣国との諍いの絶えなかつた街に平安をもたらし、交易の要衝として発

展させるとともに、絶えずあらわれる腕自慢の挑戦者たちを退け、配下とし、英雄《竜殺し》の名を大陸中に轟かせた。それは眼前で紡がれる英雄譚として、人々の心を捉えた新たな伝説であった。

だが、英雄は突如として己が領地より姿を消し、伝説は終わりを告げた。諸国の策謀に巻き込まれ命を落としたのだとも、次なる強敵を求めて出奔したのだともいわれているが、真相は伝わっていない。いずれにせよ、《竜殺し》の英雄譚は終焉したのだ。

デインの生家は南部の農家だったのだが〈竜災〉で土地が毒され、まともな作物が実らなくなった。そのため本来は後継ぎであったデインが兵役について稼ぎを両親に送っている。北部のツアルト砦動めになったのは、そちらのほう稼ぎがよいからだ。幸いにも、デインは戦場に立つことのないまま十年余を一兵卒として過ごしてきた。活躍の機会がなかったため出世することはなかったが、家業が立ち直ったら辞めて帰るつもりだったので不満はなかつ

た。そしてこの前の夏、ついに市場でよい値がつくほどの作物ができたと手紙がきた。

苦勞をかけた。いつでも帰ってこい。

手紙にはそう記されていた。もちろんデインも帰るつもりだ。いまの契約が切れるまで、あと一月もない。

「ああ、来年の種を蒔くのがいまから楽しみだ」

つぶやくと同時に、思わず笑みがこぼれる。

「畑いじりがそんなに楽しいのかよ」

「楽しいぞ。辛いことは辛いがな、刈り入れ時の、

黄金色の麦穂の波を想像するだけでそんな苦勞は吹き飛ばさ。いや、まだ青々とした麦穂を見ているのも好きだな。生きてるって感じがする」

「そんなもんかねえ。いい壁が造れたときとおなじようなもんかね」

ター口は煉瓦職人の息子だ。

「似たようなもんだらう」

「おれは親父の手伝いは辛いばかりだったがなあ。

失敗したらぶん殴られるしさ。……でも、そうだなあ、親父の後を、継ぎたかつたねえ」

ターロは遠い目で暗闇のむこうを見やる。

彼が砦にきた事情も、おおむねデインとおなじだ。〈竜災〉で食い詰めて兵隊に志願した。大きなちがいは、家族をすべてうしなったこと。ターロにはもう、帰る家はないのだ。

「……なあ、よかつたら、うちの村にこないか？ おれが継いだらもつといるんな作物を育てるつもりでな。人手が必要になると思うんだ」

二人は同期だ。ゾアルトに配属されてからずっと苦楽をともにしてきた。お互いに出世もせず、万年見張り番とまわりに擲揄されてきた。ターロがいなければ、デインはここまで耐えることはできなかつただろう。

「なんだ、おれをこき使うつもりかよ」

「軍のほうでだってお前なんかのお守りはもうこりごりだろ。身体を動かすしか能がないんだ。どうせ

ならおれのために使つてくれよ」

実際は、農作業に慣れてもない素人を雇う余裕などないだろう。それでも、ターロとならんとかできると思った。

「十年ぶりにおうちへ帰るのが怖くなったのかよ、デイン坊や」

「そんなわけがあるか」

本音をいえば、それもある。だが郷里の貧しくも穏やかな風景を、ターロに見せてやりたいと思った。その気持ちも真実だ。

「なあ、北部生まれが大河を渡るのに腰がひけるのはわかるよ。でも、おれは本当にお前にきて欲しいんだよ。一緒に次の種を蒔きたいんだ」

真面目な顔でそういうと、ターロはしばらく考えるように顔をしかめたあとで、急にニヤニヤとしたじめた。

「そんなこといって、田舎に帰ったらべつの種を蒔く予定なんだろ？ 『十年も待たせやがって』」

いわれて、カッと頬が熱くなる。

「み、見たのか？ 人の手紙を勝手に！」

「そりゃあんなアホ面さげて読んでたら、気になりもするさ」

にやついたままターロはいう。

手紙は、幼なじみのスウからのものだ。彼女とは結婚の約束をしていた。といつても、子供同士の他愛のないもので、男女の仲だったわけではない。ずっと連絡をとっていなかったし、とうにどこかに嫁にいったものと思っていた。だから麦の出来を伝える両親のものとともに、彼女から手紙が届いたときはおどろいた。

「十年も待たせやがって、帰ってきたら承知しない。十年分、殴らせてもらうから」

デインの生家を手伝っていたらしい。おどろきのあとに、喜びがきた。昔から強情な奴だったが、変わっていないらしい。村をでるときは生きてまた会えると思っていなかったスウが待つてくれている。

頬がゆるむのを止められなかった。

それを、見られていたらしい。

「新妻とのいちゃつきをおれに見せびらかそうって魂胆か？ おお、いやだいやだ。そんな気持ちの悪いもん、酒の肴にもなりやしねえ」

「お、おれはな、おれは……！」

デインはなにか言い返そうとしたが、恥ずかしさでいっばいになった頭はなにも言葉を紡ぎださない。ただ口をパクパクとさせるだけだ。楽しくて仕方がないという様子で眺めているターロを睨んで、（あとでおほえているよ）と思うことしかできない。

『十年分殴らせてもらう』ねえ……十年分可愛がつてねってことか。お熱いお熱い」

しばらくそうしてデインが睨みつけ、ターロは二やついてからかう時間がつづいた。

「お、日が昇るぞ。一点鐘を鳴らして交代だな」  
ターロがふり返り、見張り台にしつらえられた鐘のほうをむく。そしてデインに背をむけたまま、い

う。

「見たいもんだねえ、南部のうまい麦穂の揺れる景色つてのをさ……けどよ、おれなんか連れていって、邪魔にしかならねえよ。ありがとな」

その言葉で、デインは決意した。意地でもターロをつれて故郷に帰ると。その前に、まずはからかってくれた札として、鐘を鳴らしたあとで一発ぶん殴ろう。それも決意した。

——だが、二つの決意はどちらも果たされなかった。

「えっ……？」

突如としてあがった戸惑った声に、視線をターロにむける。

背から、なにかが生えていた。それも、何本も。

ターロの背は、いつもよりずっと高いところにあった。いや、ちがう。ターロの足は、石床を踏んではいなかった。

肉体が宙に浮かんでいるのだ、と理解した次の瞬

間、その背に生えているものの意味を悟った。

ターロは、無数の刃に貫かれていたのだ。

「なんだ……よ……これ……」

いまだ自身を襲った運命に気づいていないのだろう。ターロの声はただひたすらに不思議そうだった。デインが目にしたのは、昇る朝日に逆らうかのよくな漆黒の闇だった。

闇は翼の形をしていた。いったいいつからそこにあったのか、まるで夜そのもののように、音もなくあらわれた巨大な漆黒の翼が、ターロの前に広がっていたのだ。

刃は闇の翼から伸びていた。いや、剣とも槍ともつかない漆黒のそれは、刃というよりは巨大な針だった。鎧の隙間を縫ってターロの胴体を貫いている。何本も、何本も。針山にそうするように。

「え……おい……デイン……」

ターロの首が、なにかをたしかめるようにぎこちなくふりむく。その顔には困惑しかない。口元から

ごぼごぼと溢れだした血が言葉をさえぎり、床にこぼれ落ちる音だけが場を支配した。ターロの子供のような表情と、びくびくと痙攣する肉体とが、まるで別々のものようだった。

ターロは視線だけを左右に動かし、最後にデインを見て、大量の血を吐いた。それからいつものように鼻をずるずるといわせながら、かすかにつぶやく。「……麦穂の波、見たかったなあ……綺麗なんだろうなあ……」

それが、最期の言葉だった。不意にすべての針が引き抜かれ、ターロの肉体が落下した。その落ち方だけで、そこにあるのかもはや「ターロであったもの」に過ぎないことがわかった。

闇の翼が、大きく羽ばたいたように見えた。

星の光が消えた、と思った。北部の唯一の美点だと思っていた星が。見張りに立つ夜毎、ターロともにくいだらないおしゃべりをしながら眺めていた星空が。

いつの間に移動したのか、翼がデインの目の前に広がっていた。空はその翼に隠されて見えなくなったのだ。そのまま、ゆつくりと、翼はデインに覆いかぶさってくる。翼から生えた無数の巨針もまた、近づいてくる。ゆつくりと、ゆつくりと。

あるいはそれはまばたき一つのあいだの出来事であつたのかもしれない。デインはわずかに肉体を動かす間も、声をあげる暇もなかったのだから。それとも、デインの精神よりも先に、肉体が理解していたのだろうか。

——己の死が、もはや不可避であることを。

闇色の巨針が、肉体に触れる。鎧も兜もなんの意味もなさないことがはつきりと理解できた。だから、つぶやきに意味などない。デインの唇が動いたのは、無意識によるものだった。

「スウ……母さん……父さん……」

その瞬間、時間が静止したように、翼が止まった。翼のなかから、灰色の光があらわれる。その下にあ

るのは長いくちばしだ。

仮面だった。死を喰らうといわれる黒い忌み鳥グルウを模したものだ。その仮面の下から、灰色の瞳が、なにかを見定めるようにデインを見つめているのだ。それではじめて、目の前に立っているのが、漆黒の翼をかたどったマントを身につけた人間だということがわかった。

「父……を……」

奇妙な声だった。かすれ、くぐもり、ひび割れ、大神に見捨てられた者がたどりつくという最果ての国から届いているような、彼岸の声だった。

「愛して……?」

囁きよりもなおかすかなその言葉の意味が、なぜかすみやかに理解できた。仮面の男はそのまま彫像のように身動きを止めた。返事を待っているのだ。「あ……ああ……尊敬している……会いたい……」  
こたえると、双眸からほろほろと涙がこぼれた。会いたい。会いたい。会いたい。父に、母に、スウに。

一目でいいから会いたい。その気持ち溢れだした。ターロをうしなつた怒りも悲しみも、己の命が奪われようとしている恐怖も、なにもなかった。あるのはただ、郷里へ残してきた人々への想いだけだ。

「父を愛して……アルなのか……?」

仮面の男の声が、風に流される枯れ葉の音のようなかすかな声でいう。

「アル……ならば……」

星空が蘇った。覆っていた翼が移動したのだ。わずかに離れ、マントを閉じ、視線を伏せている。

「剣を……」

言葉につられて、腰に差した剣に視線をやる。

「剣を……」

ふたたび、仮面のむこうからかすれ声が漏れる。デインは気づく。彼我が距離はまさに一足踏みこみつつ斬りあげるのに最適なものだ。あまり腕におぼえないデインだったが、それでも十年余も訓練の日々を送っている。抜いて、斬る。幾度もくり返

したその動作だけならば、自信があった。

気がつくつと、自然と柄つかに手を添えていた。

十年分、殴らせてもらうから。

スウの手紙が脳裏をよぎる。帰るのだ。故郷へ。

父母のもとへ。愛する女のもとへ。そのために、剣をふるう。そのためにこそ、訓練の日々があった。

そう思えた。

「剣を……」

三度、仮面の男の声が響いた。マントは閉じられ、顔は伏せられている。対して、デインの利き腕はいつでも柄を握にぎることができている。いまならば、そう、この瞬間ならば、間違いなくデインが剣を抜いて斬るほうが速い。

剣閃けんせんがはしった。

自分がこんなにも鋭すどどく剣をふることができるなど、思いもよらなかつた。ターロが見ていたら、さぞおどろいたことだろう。頭の片隅でそう思った。仮面の男は顔を伏せたまま、ぴくりとも動かない。マン

トごと切り裂きくだけだ。

帰る。帰れる。

だが、剣は空を斬つた。

ふたたび星空が消えた。

「ちが……う……」

いつ動いたのか、わからなかつた。気がつくつと、デインは漆黒の翼に抱いだかれるようにして覆おわれていた。

「アルでは……ない……」

灰色の目が、限界まで近づきデインの瞳をのぞきこむ。と、眼前でその瞳は灰から黒へと変じた。その翼とおなじ、すべてを呑のみこむ漆黒。ありとあらゆるものを塗りつぶすような、闇よりも暗い黒。不意に気づく。

臭いが、ない。

いっそ死臭でもしたほうがまだよかつた。生あるものならばどんな生き物でもわずかにはするであらう臭いが、なにもなかつた。そこにあるのは、すべ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。